


リーリーとシンシンは、2011年2月21日に来日しました。発端は3年前に遡ります。2008年4月30日未明、日中国交回復20周年の記念としてユウユウ（オス）と交換され来日したリンリン（オス）が死亡し、上野動物園にジャイアントパンダ（以下、パンダ）が不在となりました。直後の5月6日、来日していた胡錦濤国家主席が上野動物園にパンダ2頭を貸与する考えを表明しました。

しかし、2頭の来日は簡単には進みませんでした。日本と中国の関係がそれほど良好ではなかったこと、また、パンダの来日が今までと違って贈呈ではなかったため高額な費用が問題になったことなどが影響したのです。上野動物園の2008年度入園者数が60年ぶりに300万人未満となったことで地元では誘致活動が進んだ一方で、都や園にはパンダ導入に対する懐疑の声なども寄せられました。最終的に、2010年2月の東京都知事の導入の表明、同年7月の中国との調印式を経て、2頭は日本に到着しました。

今までのパンダと違い、歓迎一色ではなかったリーリーとシンシンの来日は、パンダという動物が政治的な存在であることや地域にとって意義が大きいことを明確に示すこととなりました。そして来日後は、賛否両論の状況から打って変わって子の誕生への期待を背負うこととなります。

2012年7月5日にシンシンが出産したものの、その子は6日後に死亡、次の年からは偽妊娠、弱い発情と続きました。そして2017年6月12日に待望のシャンシャン、さらに2021年6月23日には上野動物園で初めてとなる双子が生まれました。2020～22年には新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のための断続的な休園、2023年2月21日には上野動物園で初めての自然繁殖で誕生したパンダ・シャンシャンの返還など、2頭を巡っては社会的な関心も集めてきました。

リーリーとシンシンは、パンダの歴史における一時代をつくるとともに、その時代の日本人の集団的な記憶の大きな軸の一つとなっていったのです。



1歳のころのシャンシャン（手前）と、シンシン。2018年11月